

18歳未満の未成年者の購入を禁止します  
**FOR  
ADULT  
ONLY**  
18歳未満の未成年者の購入を禁止します

# 隊長の一番長い日

Captain's Longest Day



# 隊長の一番長い日

Captain's Longest Day

# INDEX

隊長の一番長い日 3P

付録 待ち受け画像 21P



コツ……コツ……コツ……

「……もうすぐよ」

「……」

「正直、驚いたわ。あのときの子が今や管理局の  
エースストライカーだなんて……」

「フェイトもそうだけど、管理局も随分質が下がっ  
たわね」

「……」

「……一つ教えてほしいんだけど？」

「…なんですか？」

「どうして、フェイトを助けに来たの？」

「？」

「そうでしょう？ 同じSクラス魔導師を楽に捕獲で  
きる相手に同ランクとはいえあなたと友人二人  
でバックアップもなしに救出作戦なんて…」

「きっと、あなたには解りません…」

「…そう、ならば無理には聞かないわ。とくに  
役立つ情報でもなさそうだし…」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

「……そういうあなただから、決して解らないん  
です」

グググ……………

「はやてちゃん！」

「あ…な、なのはちゃん?！」

「あら、パイプのバッテリー、まだ切れてな  
かったのね？」

「あ…あう…な、なのはちゃん…見んといて…  
いやあ…」

「…ふ、プレシアさん！あなた……っ」

「こんな状態だとは思ひもしなかった、とは  
言わせないわよ。予想はできてたはずでしょ？  
……なにせ、自分自身がされてきたことなん  
だから…」

「！！っ…」

「この一週間、私があなただけを”可愛がっ  
てきた”と思ってたの？だとしたら随分自意  
識過剰なんじゃない？」

「友達があんな目にあってるだなんて、想像  
したくもありません——あうっ！」

「そういうのはね、危機感の欠如っていうの  
よ……私、そういう子は嫌いなの」

「や…やめて…なのはちゃんに酷いことせん  
といて……」

「そう、せっかくの再会だものね。

……それじゃあ、早速はじめましょうか」

「? ……なのはちゃん、始めるって…？」

「……」





「あ……」  
「!？」  
「あら、あなたも驚くことないでしょ？さっきの話、聞いてなかったの？」  
「あう…んっ…んふう…あ…」  
「あら、今までよりも随分感度がいいわね、先っぽ、もう硬くなってるじゃない？」

——ツンツ

「ああっ！ ……は、はい……」  
「もしかして、あの子に見られて昂ぶっているの？」  
「……は…い」  
「?! な、なのは…ちゃん？」  
「ああ、まだ言ってなかったわね。この子、私との取引に応じたわ」  
「?! な、なん…やて？」  
「あう…は はやて…ちゃん……ごめん…私……  
……あうっ！んああっ！」  
「どうしたの？揉んだだけでそんなに声あげてたら、これから持たないわよ？」  
「ひっ！…んふっ…んむ…っ」  
「そんな…なのはちゃんが……う、嘘や！そんなことあるわけ…」  
「…ほ、本当なの……はやてちゃん…」  
「?! なのはちゃん…」



「ぶ…プレシア・テスタロッサ! どういうことや! 説明  
 しい!」  
 「めんどくさいわね…代わりに説明しなさい」  
 「あう…わ、私…フェイトちゃんにどうしても会いたくて  
 ……ああ…ダメ…そこ……」

——ギチッ

「はうっ?!」  
 「命令された以外のことはするなと言ったはずよ?  
 あなたが説明するのは取引のことでどこが感じるの  
 かということではないわ」  
 「…は、い…」  
 「そ、それで……私……プレシアさんに…私がフェイ  
 トちゃんの代わりになるからって……」  
 「そんな……嘘や…」  
 「嘘かどうか、目の前の現実がすべてじゃない?」  
 「あ……んああ……や…だ、ダメです…そんな…」  
 「…あかん!なのはちゃん、そんな条件飲むわけ…」  
 「つくづく面倒な子ね…(スッ)」

グッ　グウグウグウグウウウウウウ——!!

「ひっ! ひあああああっ?!」  
 「は、はやてちゃん!?!」  
 「そのパイプ、外部魔力に切り替えたわ。Sクラスの  
 振動でよがり狂いなさい」

「さあ、どうしたの、私は命令したはずよ？」  
「…あ……は……い……」  
「なのはちゃん……お、お願いやから……やめ……」  
「……ごめん……はやてちゃん……」

——チュブツ

「んっ……」  
「パイプが”弱”のままバッテリー切れになるまで放置しておいたから  
もうピショピショね」  
「くっ……」


——チュパ——ピチャ——クチュツ

「あ……ん……んは……あ……っ だ、ダメや……なのは……ちゃん……」  
「ふむっ……ん……あふ……ぷはっ」  
「最初に奉仕させたときから気になってたけど、あなた、初めてじゃないわね？」  
「あむ……はい……」  
「いつもの相手は誰かしら……この子？」  
「ち……違……あああ……や、やああ……」  
「それじゃあ聞くまでもないわね……」  
「……」  
「あなたのほうはどうなの？最初にココを責めたときはまだ  
処女だったようだけど」  
「あう……し、知らん！そんなこ……とっ！」  
「そう……あなたのお友達はまだ立場がわかってないようね？  
教育してあげなさい」  
「んむっ……はい……」

——チュブツ——チュブプツ

「ひいあっ！ やっし、舌、らめえっ！ な、なのはちゃんっ  
舌……入れんといてええっ！」





「んっ…あ…はああ……ら、らめえええ…」  
「随分情けない声を上げるのね。仮にもこの子や  
フェイトの上官なんでしょう？」  
「そ…そんな…」  
「…んむっ……ごめんね…はやてちゃん、ごめん  
ね…ごめん……」  
——ぐいっ！

「うぶっ！」  
「ああああっ！ひあっ！」  
「誰がやめていいと言ったの？」  
「あぶっ……す、すみま…おぶっ！」  
「返事をする余裕があるなら命令を守りなさい」

——チュッ——プチュッ……

「あ……あふう……ああ……い…？  
や…な、何……コレ……？あ…や…ひ……」  
「……イクのね？友達の舌で……なんてはした  
ない部隊長かしら…」  
「ひ…あ…」  
「」  
「い…イヤや…そんな…ああ…こ、こんな……なの  
はちゃんの目の前で……  
イヤあ……な、なのはちゃん、か、堪忍してえええっ！」

——ビクッビクッ！——

「ひああああああああっ！い、イヤああああああっ！」  
プシャアツツ——！



ピチャ……チャツ……

「ハアツ…ハア……ひっ…ぐすっ……」  
「んっ……はやてちゃん……」  
「あらあら、大事なお友達をこんなに汚して……」  
「……っ！あなたが……っ」  
「手加減せずにイカせたのはあなたよ。  
——親友を、その舌で」

「う……」

「……あ…なの、はちゃん……」  
「はやてちゃん……」  
「……ごめんな…堪忍な…なののはちゃんのお顔…  
汚してもうて……」  
「！！ そ…そんな……私のせ(ゲッ)あうっ！」  
「そうよねえ、自分ばかりいい思いをして、友達はそのま  
まという訳にはいかないわよね？」  
「な…なんや、それ…どういう…？」  
「ほら、さっき教えたとおりに、部隊長さんをお願いしなさい、一尉どの？」  
「う……」  
「どうしたの？私との約束、破るつもり？(キチ)」  
「ひあぁっ！や…ち、乳首…ダメ…い…言います…はや  
てちゃん……」  
「な…のは…ちゃん？」

「や……八神二佐どの……私、高町なのは一尉の……  
い、淫乱なメスマ○コを…舌で責めてください……」  
「な……っ！」

「…お、お願いします…部隊長……私の…淫乱なマ○コを、お口で気持ちよくしてくだ……」  
「やめるんやっ……！プレシア！あんた一体なのはちゃんに何を…！？」  
「洗脳や強制魔法などという無粋なものは使っていないわ。その子の意思よ、そうでしょう？」  
「あ……はい…」  
「嘘やっ！そんなわけ…」  
「さっきも言ったけど、これは取引なのよ」  
「そう…なの…私、フェイトちゃんの代わりに……」  
「それはプレシアの罠や！なのはちゃんを思い通りのオモチャにするための……っ！約束なんて守るわけない！」  
「あら、人間性が悪いわね？約束どおり私の前で二人のレスショーを見せてくれたら、フェイトとあわせてあげてもいいと言ってるのに……」  
「あう……は、はやてちゃん……お、お願い……でないと…私……」  
「なのはちゃん……」

—————ごめん」

「！！」  
「ゴメン……なのはちゃん……私もフェイトちゃんのためなら何をしてでも助けたいんや……でも、あの女は信用できへん…なのはちゃんと私を洗脳するために、フェイトちゃん的身柄をエサにしているだけや……だから…」  
「それは……でも……」  
「さすがに特別捜査官どのは聡明ね。ついさっき、あんなにあられもない声でいった子とも思えないわ……スッキリして理性が戻った？……さて、どうやら取引はお流れみたいね……それじゃあ—————」

—————ヒュッ



——ガッ！


「ぐっ……?!」  
「!!なのはちゃん?!」  
「悪いけど、役に立たないオモチャをいくつも置いておく余裕はないの……せめて捕虜としてふさわしい方法で処刑してあげるわ」

——ギッ…ギィッ……

「が……あ……かはっ!……あ」  
「残念だったわね高町一尉、フェイトを救い出せないばかりか、親友のせいで惨めな死に様をさらすことになるなんて……」  
「やっやめて!お願いや!お願いやからこんなこと……プレシアっ!!」  
「悪いけど、これも取引のうちよ……捕虜として次に処刑されるのはあなただから、よく見ておきなさい」  
「あ……あ……は……やて……ちゃ……ゴ……メ……がはっ!」  
「!!なのはちゃん……」  
「……わかった!私も、私も何でもする!奴隷にも、オモチャにもなんにでもなるからっ」  
「それが奴隷としての頼み方? なにか勘違いしてるんじゃない? …ほら、この子もうすぐ意識を失うわよ?」

「あ……うあ……」

「ぐっ……」  
——お、お願いしま…す! 私の全てを差し上げます! どんな恥ずかしい仕打ちも、淫らな調教も全て受け入れますから…お願い……友達を……グスッ……助け……て…」




「ゴメンな…本当にゴメンな…なのはちゃん」  
「あう…はやてちゃん、私こそ……」

「お友達ごっことはそこまでにして、早速はじめて頂戴」  
「(……なのはちゃん、解ってると思うけど……)」  
「(うん…私も、スナリいくとは思ってないよ…でも、今はこのチャンスに賭けるしか……)」  
「(そやな……それじゃ、キスするで……?)」  
「うん……んむっ……」  
「む……ん…プハッ……なのはちゃん、積極的すぎや…いきなり舌入れて…」  
「ん…ごめん…つい」  
「これやから……でも、上手やね…もう一度…」  
「んむっ……ん……あ…」

クチュ……チュパツ……

「濃厚なキスもいいけど、せっかく手を使えるようにしてあげたんだから、もっと積極的になったらどうかしら、部隊長どの？」  
「(好き勝手言う人やな……なのはちゃん、ええか?)」  
「(い、いいよ…はやてちゃんも、揉むの上手だし……)」

「…あ……ああ…ん……あ…そ、こ…」  
「(ゴメンな……コレだけは、手抜きとかできへんねん……) ん…なのはちゃんの乳首…もう堅くなってるね…(クィ)」  
「あっ！ やあ……ダメ……弱いのお…」  
「(アカン……これは作戦の内なのに……なのはちゃんの反応が可愛すぎるから……)」



「(なのはちゃん、さっきの"お礼"させてもらうで…)」  
「(え……はや……っ?!)」

ガバッ———!

「?! はやて…ちゃん？」  
「脚の力、抜いてな…」  
「あら、さっきと違って随分積極的ね？私に従ってるのは時間稼ぎの作戦だと思ってたけど…？」  
「……」  
「(あの…はやてちゃん…、プレシアさん解って…)」  
「(言わせとけばええ……それより…)」

チュッ……

「あ……んあ……っ?! (はやて…ちゃん?!)」  
「(生半可な演技しててもどうせバレるんや。言うとおりにしてんやから向こうも静観するしかあらへん…なら、ここはこのまま徹底的に演技して、向こうの油断を待つんや……)」

ピチャっ……

「あ……あああ…で、でもオっ?! (だ…だめ……このままじゃ…演技じゃなくて……)」  
「(私も……ホントに忘れてしまいそうや…)なのはちゃんのオ○ンコ…もうビショビショや……」  
「いやあ……い、言わないで…」  
「フェイトちゃんが羨ましいなあ……こんな可愛いオマ○コを独り占めできて……」  
「や……やあ…そんな……」



「それじゃあ、本人に聞いてみましょうか？  
——どうなの、フェイト？」

「?!」「!!ふ、フェイトちゃん……!？」  
「なのは……はやて……」

「そんな…どうしてフェイトちゃん…が？」  
「おかしな事言うのね…フェイトと会いたがっていたのは自分自身でしように…嬉しくないの？」

「そ、それは……」

「なのは……きて、くれたんだ……」

「フェイト、この子たちはあなたに会いたくて来てくれたそうよ……嬉しい？」

「はい……嬉しいです……」

「フェイトちゃん…」

「ふ…プレシアっどういう事や？」

「どうもこうも、取引が成立したから呼んだまでよ。  
——ところでフェイト、さっきの質問だけど…」

「それは…私はいつも、なのはにオ○ンコを責められる方でしたから……」

「ふ、フェイトちゃん、あの……////(カアツ)」

「(逆だったんか……)」

「そう、それじゃあ今はどうなの？あの子に責められたい？それとも……」

「今…は……」

「今……？フェイトちゃん……？」



ほろんっ

「!!そ、それ……?!」  
「な…で、デカ……っ!!」  
「今は……お母様がくれたコレでなのはの可愛いオマ○ゴを……私のものにしたい……です…」  
「そう…ところであの子たち、自分の身を捧げる代わりにあなたを自由の身にしてほしいって言ってるけど」  
「!そ、そうや…フェイトちゃん、もうこんな女に従うことないんや!」  
「フェイトちゃん…お願い、エリオやキャロのところに返ってあげて…みんな待ってるんだよ…」  
♪ジヤジヤジヤ ムウエー♪

「……なのは、はやて………ゴメン…私、もう戻れない」  
♪ターイーウノキハ ターグレー♪

「そんなっ!!」  
「なんやて!?!」

「つまりはそういうことよ…フェイトは母親である私の悲願、アリシアの復活のためにその身を捧げる覚悟が出来てるの」  
「……嘘やっ!どうせアンタの入れ知恵で…」  
「フェイトちゃん……ホントなの…?」  
「ホントだよなのは……もう私には…ここしかないの…それに、なのはもはやてもいらない世界に戻ったって…」  
「フェイトちゃん……」

「麗しき愛情ね…反吐が出るわ……さあフェイト、あなたにオモチャをあげるわ——この二人よ」  
「!!」  
「ありがとうございます……お母様……」



ぐちゅっ……ちやぶ……ぶちゅ……っ

「ん……あ……なのは……上手…」  
「むぐ……ん、っはあ…フェイトちゃん……お願い、  
こんなこと……やめ…ングラっ!？」  
「もう……ダメだよなのは…口を休めちゃ…」


ぢゅぶっ……ぐじゅっ……

「嗚呼……いい…  
……なのは、いつも私にフェラさせてたよね…魔力  
で作ったデイルドオに……」  
「んっ……んむ……」  
「あの時、なのはは私のフェラで感じてくれてたけど、  
ホントに感じてるのか不安だったんだよ……おちん  
ちんの感じ方ってよく解らなかつたから…」  
「……(フェイトちゃん……また、固くなった……)」  
「でも、今は解るよ……なのはのお口で、私のおちん  
ちん…もう我慢できないくらい感じてるの……あ…  
…ソコ……」

ぢゅっ……ぶ……

「ああ…そ、ソレ、いいよ……先っぽの裏側…すごい  
い……私…なのはの口で今犯されてる…」  
「(すごい…まだイってないのにお汁がこんなに……  
あ…なんだろう、この気持ち……フェイトちゃんのお  
ちんちん…もっとこうしていた…い……)」  
「なのは……有難う…私のために来てくれて……  
お礼に、このおちんちんでなのはを思いっきり愛して  
あげるね……」





「——あっちは随分仲睦まじくやってるわね  
こちらもそうしたいけど……」

「んむ……」

「…これでは無理ね……(ぐいっ)」

「んぐうっ！」

ぶちゅ…っ

「んぐ……むふ…んん……」

「そう……頑張って濡らしておいたほうがあなた自身のためよ……もうすぐコレが、あなたを貫く事になるんだから」

「……ぐ…(こ…こんなモノで……?!)」

「言ってみれば未開の世界で未だに行われてるような「串刺し刑」ね…。まあ命までは奪わないけど、せいぜいさっきいった時のように、可愛い声で鳴いて頂戴」

「(そんな串刺しやなんて……これが…私の処刑なんか…?)」

「……ところで、あなた、<sup>こっち</sup>アナルの具合はどうかしら？  
(ぐちゅっ)」

「?!んん ーっ?!んっ…むぐ…」

「…すごいわね、一週間念入りに調教した甲斐があったわ…もうグチュグチュじゃない」

「(ああ……イヤや……お尻だけは…私……)」





「ひあ……っ あ…な、なに…」  
「んっ……あ…い、イヤや……いやあ……」  
「管理局のエースライカーが情けないわね…そんな  
なにアナル責めの快楽が忘れられないの？」  
「震えてるねなのは……すごく可愛いよ…(キュッ)

——ぐいっ

「あっ……や……そっちは…」  
「ひいあっ！」  
「前の双頭パイプだけでも良いんでしょけど、私達も  
楽しませてもらわなきゃね……せっかくだから、後ろを  
頂くとしましょうか——フェイト、準備はいい？」  
「はい、お母様……」  
「あ…フェイト…ちゃん…私…ソッチは…」  
「大丈夫…なのはのアナル、充分やわらかいよ…」  
「こっちのほうはもうトロトロのケツマ〇ゴに仕上がって  
るわ…」  
「いやあ……そんな…ケツマン〇やなんて……」  
「さあ、それじゃあ覚悟はいいわね？」  
「二人とも…息を吐いて、お尻の力を緩めてね……」  
「ああ…く、くる……」「ひ……ひあああっ！！」

ノ———ずっ ずぬぬぬぬっ

「んああああああっ！！」「ひぐうっ！」

「ああ…すごい…なのはの<sup>なか</sup>肛内……キツくて……熱いよ…」  
「こっちも…相変わらず極上の締め心地ね。前のパイプの振  
動がこっちにも伝わってくるわ……さあ、動くわよ？」  
「ひ……や……」

——ぬちゅ——ぐちゅ——ずぬっ

「ああっ…ひあっ……」「んああああ……ひぎいっ！！」  
「な……なの…は…いい？ アナルとオマ〇ゴ同時に…犯さ  
れて……気持ち…ああ…い、いいっ？」  
「ひぐ……あ…い…イっ……や…あ……あっ！は、やて…  
ちゃん……も……もお？！」  
「あぐ……ひい…ああ…そ、そんな……私…こんなのって…  
こんなのってええ……？！」  
「んっ…や、やっぱり処刑なんて…勿体無いわ……ねっ！三  
人とも…私のベットとして飼ってあげるわ……っ 極上のケ  
ツ〇ンゴ……y **「トランザム!!」** キュイイイイイイッ  
「なんだ……これは……?!」

これは……  
沙慈・クロスロードの  
妄想……

サジ……  
今までの内容……  
もしかして……？

ちよ……

どうして  
ここ(妄想内)に  
いるんだあー!!!!

あとそれをルイスだと思えっ  
この字はルイスだと思えっ!!!

次回「全裸で待ってる」

## 待ち受け画像<sup>アイコン</sup>コーナー

### 裏表紙のなのはさん

元々表紙にするつもりで描いてました……が、本の内容が固まり始めてきた段階で下の三人の構図にするため、裏表紙に回しました。

BJのボンテージ的アレンジは自分の中ではそれなりに気に入った出来にはなってますが、元々部品の多いデザインですし、やり様は他にいくつもあるとは思いますが。

フェイトさんのBJ(特に真ソニ)は元からソレっぽ(暴言)いのであまり変化を感じませんが、こういうデザインの服をどれくらいシルエットを変えずに淫靡に魅せていくかという部分に遣り甲斐を感じています。

……ああ、つまりそういう病気です俺orz



<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/nanohaBDBJ.jpg>



### 表紙

そして今回の表紙です。

最近コミックスタジオで線画→フォトショップで着色という流れが出来つつあります。

夏コミで発行した「GREEN×3」以降、ペン入れも全てCS上で行っています。手でペン入れすることはめっきり減りましたね…楽なのはいいんですが、必要に応じて紙での作業が今までどおり出来るかどうかは不安なところです……

当初は悪堕ちしたなのはさんがフェイトさんとはやて隊長を調教する話になる予定だったので、なのはさんにはどちらかというと女王様的なデザインの衣装を着せています。



[http://45acp.sakura.ne.jp/3g/cover\\_C75.jpg](http://45acp.sakura.ne.jp/3g/cover_C75.jpg)



# 存のは デラックス!!



2008年度 うれしくないパンチラ・オブ・ザ・イヤー受賞

## マーヴェラス!!

……なにこのクリーチャー……

主に中の人(エムエムではないほうの意味で)的には「スパルデラックス!!」のほうがネタとしてまだつながりあるし解ってもらいやすいんですが、ここはネタの自然さよりも、三人並べられる「キモs……いや、インパクト」を選びました。当然中にはなのはさんたちが……複雑な表情で……

このネタについては従来のQVGA液晶で使用するキャラ単体のものと、試験的にネットブックやWillcomD4で利用できる「1024×600」ピクセルのモノとをそれぞれ用意しました。

ナノハデラックス!!

<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/nanodera.jpg>



フェイトデラックス!!

<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/fatedera.jpg>



ハヤテデラックス!!

<http://45acp.sakura.ne.jp/3g/hayadera.jpg>



1024\*600Pixel 壁紙 アドレス <http://45acp.sakura.ne.jp/3g/nanohaDX.jpg>

# あとがき

「……長官！ もともとこの戦争は三国同盟締結の時のあなたの「止むを得ない」からはじまった……。止むを得ないに始まり、止むを得ないに終わるか……！」

という風に、映画「連合艦隊」ごっこというアソビが再びブーム再燃の兆しを僕の中だけで見せている昨今、皆様いかがお過ごしでしょうか？

(この丹波哲郎パートごっこの他に長門裕之が中鉢二飛曹に説教するパートと「行きましよう沖繩へ」パートもブームです、僕の中だけで。

あと、本のタイトルの元ネタであるはずの「日本の一番長い日」ごっこについてはあまりブームにはなってません、僕の中だけじゃなく世間一般に)

このたびは本誌を手にとりいただき誠に有難うございます。今回は今まで出てこなかったなのはさんやはやて隊長も交えて「主役三人をそろってボンデージ！」というコンセプトで作ってみました。「ボンデージ！」のあたりに、ちょっと日本語としてどうかな？という部分があったら、目瞑ってけると楽です。

2008年ももうすぐ(これが発売される時刻からだいたい38時間後)で終わります。当サークルは今年、前身の「ダメ工場98」から数えてサークル活動10年目の節目を迎えていたわけですが、この間何をやってきたかというところ……

「リンディさんとシャマルさんとユーノきゅんと  
なのはさんとフェイトとははやて隊長をイロイロしてました」

……全く成長していない…(画像略)

来年の予定はまだ未定ですが、公開予定の劇場版を見据えてスケジュールを組んで行きたいと思っています。とりあえずは春のリリマジ6にむけて、そしてひっそり続けている模型ディーラー「アタゴシタ海軍工廠」もなのはネタで何か出したい…出せればいいな……

……まちよつとは覚悟しておけ  
(さだまさし「関白宣言」より)

とまあそんな調子で2009年もリリカルなのはとボンデージフェティッシュを追求していく所存ですので、皆様よろしく願いいたします。

2008.12  
[45]  
ACP



アタゴデラックス!!





ハ...いえ、なんでもありません...

# お く づ け

**発行日** 2008年 12月30日  
**発行者** 45ACP

URL  
e-mail

<http://45acp.sakura.ne.jp/>  
[giro@45acp.sakura.ne.jp](mailto:giro@45acp.sakura.ne.jp)



This contents was printed by Tokyo Shimaya Printing.co

Mobile QR

For **Adult** Only

# 隊長の一番長い日

Captain's Longest Day

WARP. Co Presents